

## 図像資料と民俗学

福田 ア ジ オ

FUKUTA Ajiō

### 1 語りの民俗学・行為の民俗学

民俗学は英語の *folklore* の訳語としての意味を与えられている。その結果、一般には、日本の民俗学と欧米の民俗学とは同じような方法と対象をもった学問として理解されている。しかし、それぞれの民俗学の具体的な研究を見てみると、その内容において、したがって方法においても大きく異なることが判明する。

欧米の民俗学は一言で言えば「語りの民俗学」と位置づけられる。*folklore* という用語が19世紀中頃に作り出されたイギリスにおけるこの学問は、人々が伝えてきたさまざまな伝承を対象に研究するものと理解されてきた。昔話、伝説、民謡など、人々が語り、それを聞くという関係の中で存在する事象が中心的な内容を形成してきた。一般にいう、口頭伝承ということになり、また内容としては口承文芸と呼ばれる事象である。アメリカにおいては、古くからの昔話や伝説ではなく、そのような歴史的蓄積をもたない、現代社会で生成され、語られるうわさ話、世間話が専ら関心の対象であり、特に都市伝説という新しい概念が形成されることで、民俗学は現代の語りを扱う学問と理解されるようになった。このような傾向は、近年の日本の民俗学にも少なからず影響を与えていることは事実であり、日本の民俗学も語りを重視し、その復権が見られる。英語の *folklore* が口頭伝承という語りを示したことにより、日本の民俗学研究者も、語りとしての民俗を表現するときには民俗とは言わず、フォークロアと表現することに、その感覚が示されている。

それに対して、日本の民俗学は「行為の民俗学」と表現できる。日本の民俗学は言うまでもなく柳田国男によって開拓された。柳田はヨーロッパの民俗学から学びつつも、独自の民俗学を作り上げた。そのもっとも大きな特色は、民俗学の研究対象を人々が行ってきた行為に中心を置いたことである。日本の民俗学の各種の概説書や案内書が示しているように、行事・儀礼・組織・制度が民俗学の内容を形成している。家族・親族・地域という社会制度や社会組織、通過儀礼や年中行事という人々が行っている様々な儀礼、稲作や畑作の農耕技術や農耕儀礼、あるいは神社の祭礼行事や講集団の活動、イタコやユタの行う行為などの信仰事象である。それら人々の集合的な事象を主として聞き書という方法をとおして獲得しようとする。

言い換えれば、語りを手段として行為を把握しようとするのが日本の民俗学であると言えよう。そして、それらの事象を把握して、それらの行為を行う人々の心意に達しようとする。意識・観念・感覚、現代の用語で言えば心性とか感性というべきことがらを柳田は心意と表現した。民俗学は主として聞き書をとおして人々の行為を把握し、その類例を日本全体から集積して、類型化と比較によって

歴史的展開を明らかにすると共に、そこに秘められた心意、心性、感性をも併せて把握しようとする。フォークロアと同義語とも理解される民俗という用語は、口頭の昔話・伝説・民謡・世間話などには用いず、行事や儀礼について使用する傾向が一般的である。これは欧米のフォークロアと日本の民俗が相違することを感覚的に示しているのである。

## 2 聞き書は手段

もしも日本の民俗学が行為の民俗学と把握できるのであれば、民俗調査の基本的方法と考えられてきた聞き書は、民俗を把握するための手段と位置づけられる。伝承者と呼ばれる被調査者に対して質問をし、それに対する回答を得て、調査ノートに筆記する聞き書が民俗調査の基本である。その伝承者の語る内容は、行事や儀礼であったり、組織やその活動であったりする。伝承者と呼ばれる人物が体験し、自らも一定の条件が揃えば行ってきたことを、その記憶から呼び出して、言葉で語ってもらい、その内容を聞き書する。それが民俗と呼ばれる。即ち、聞き書を通して行為を把握するものである。今までに刊行され、蓄積された民俗調査報告書や民俗誌と呼ばれる記録は、その大部分がその種の民俗で占められている。聞き書をとおして語りを引き出し、記録することで終わるのではない。語りに含まれている人々の行為を把握し、記述する。したがって、人々の行為を直接調査者が目の当たりにして把握するものではなく、口づてに把握するのであり、それは行為を間接的に把握することである。

聞き書という間接的な行為の把握は効率的である。時間を短縮して行為を把握できるからである。民俗調査のなかに必ずのように含まれる年中行事は、1年間の行事である。もしも実際に行事に立ち会い、観察して記録するとすれば、1年間を要する。まして通過儀礼のように、人の生涯を記録するとなれば、一人の調査者が直接立ち会うことはほとんど不可能である。このことはまた空間的に広がりをもつ事象についても言える。あちこちで行われる事象をすべて追いかけることは困難なことである。それに対して、聞き書という方法は、1年間の行事を数時間の聞き書の中に濃縮して把握することができるし、広域的に展開する事象を同時に把握することができる。適切な質問を繰り返すことによって、民俗として必要な情報のみに絞って回答を得て、記録できる。通過儀礼であれば、それはさらに効率的であると言えよう。実際の行事や儀礼に直接接して観察によって記録を作成することは現実に不可能であるが、聞き書という方法を採用すれば可能となる。

聞き書は文字での記録だけではない。伝承者に質問し、それに対する回答を得て、記録するが、話の経過の中で概念図、模式図やスケッチをフィールドノートに記載することは当たり前のこととして行われてきた。最も早い時期に民俗調査を行った山中笑（共古）は、任地の山梨県内の民俗を記述する際に、具体的な事物を多く描き、説明している（山中笑 1902～1903）。山中共古はおそらく現地を訪れたときに持参したノートにスケッチしたり、村人から教えて貰った図を書き込んでいたものと思われる。

柳田国男のフィールドノートというものは知られておらず、果たして存在したかどうかは疑問であるので、民俗事象を図に描いたかどうかは分からない。しかし、折口信夫にはフィールドノートを整理した記録が残されている（折口信夫 1921, 1923）。それを見ると、聞き書の過程で、文字では表現

できない事項について図を描いて挿入している。それは実際に見て確認した結果を描いたものもあるであろう。聞き書の過程でノートに書き入れてあったと解することが出来る。

このようなことは誰しもが実際に行ってきたことである。民俗学研究者は誰でも、自身のフィールドノートを見てみれば、そこには聞き書の過程で描いた図が少なからず挿入されていることを発見するであろう。そのことに特に自覚することなく行ってきた。民俗学ではフィールドノートの記載方法について特に検討されたことはなく、まして書き入れられた図について考えられたことはない。そして、民俗調査報告書や民俗誌の記述に際しては、それらノートに書き入れた図を文字に置き換えて説明することをしてきた。調査の過程で描いた図は、調査結果の記述には多くが失われ、わずかな図のみが残された。

フィールドノートに図を書き入れるのは、一つには被調査者である伝承者が説明の過程で紙に筆を執って書きつつ説明するからである。伝承者が言葉で説明しても、聞いて書き留める調査者がその内容を理解できず、文字で書くことができないことは多く、それに業を煮やした伝承者が自ら図を描いてくれることが多い。また逆に、調査者が聞いた言葉が理解できず、伝承者に求めて図を描いて貰うことも少なくない。

民俗調査は従来も副次的に図像を生産してきた。しかし、そのことに自覚的ではなかった。聞き書調査における図像の生産について今後は自覚的に進めなければならない。そして積極的に図を描き、民俗の記述・分析にも活用しなければならないであろう。

### 3 行為の把握と観察

日本の民俗学は行為の民俗学であるところに特色がある。語りを手段にして、行為を把握することが専ら民俗調査であると理解されてきた。しかし、だれでもが承知しているように、行為は聞き書によってのみ把握する必要はない。有名な柳田国男の民俗資料の三分類は、その第1部として生活外形あるいは有形文化を掲げている。第2部が生活解説あるいは言語芸術、第3部が生活意識あるいは心意伝承である。この第1部の生活外形、有形文化を、「目の採集、旅人の採集と名けてもよいもの」と説明した(柳田国男 1934)。すなわち、行為の直接的把握を意味している。目によって観察し、記録できる事象である。

観察によって民俗を把握し、それを観察記録として資料化することが、民俗調査の方法としても採用されてきた。観察には多様な方法があることは言うまでもない。もっとも一般的には行事や儀礼を見学して、自分の目で確認したことを記録するものであるが、その際に様々な補助的方法が採用される。それが観察結果の記録法にもなる。

①文字による記録 観察結果の記録法の第一の方法は、文字で記録することである。見たことを文字でノートに書き留める。観察結果を資料として活用する研究が、文字によって行われるのであるから、資料も文字化してあるのが最も効率良いと言える。従来観察結果の記録はほとんど疑うことなく文字化していたのは当然である。景観にしても、生産活動の様相についても、あるいは冠婚葬祭と呼ばれる儀礼や年中行事にしても、また祭礼にしても、その場において観察し、その場でフィールドノートに記入する。

②実測図 観察の過程で計測して、実測図を描くことも有力な方法である。物差しで長さを計測して、形状を正確に描くだけでなく、そこには観察結果も描き込まれる。民家の間取り、民具の実測図など、一定の技法に従って対象を正確に記録し、再現可能な状態で報告する。考古資料の記録法が民具調査に影響を与え、発掘された土器や石器を実測して記録すると同じように、民具やさまざまな装置を実測図として描き、報告書や論文に掲載することが行われてきた。

③スケッチ画 観察の結果を最も簡便に記録する方法がスケッチであろう。自分で観察した結果を、自分の筆で描くのであるが、実測と違い、印象に残った部分が強調される。スケッチは様々な場面で作成される。行事や儀礼に臨んで、その様相を簡単に描くことはフィールドワークにおいてしばしば行われる。フィールドノートには観察の結果として描かれた多くのスケッチ画を含んでいるものと思われる。しかし、調査結果を記述する段階で、そのスケッチ画が掲載されることは少ない。利用されることなく、ノートの中に保存されていることが多いであろう。

④写真 観察そのものの記録とは言えないが、観察して注目した事物をカメラで撮影して画像にして記録することは早くから行われてきた。民俗調査にとってカメラを携行することは古くから当たり前のこととして行われてきた。調査に出たときには、そこで注目した事物や事象をカメラに収めることは誰もが行ってきた。特に、祭礼行事の記録法として最も一般的な方法であった。かつてはフィルムに撮影して、それを焼き付けて写真をアルバムなどに整理保存し、必要に応じて参照することが行われてきた。また民具や装置を記録する台帳には、撮影した写真を貼り付けることがまた常識である。

⑤動画（ビデオ）近年、急速に観察結果を、あるいは観察と並行して記録する手段がビデオで映像を撮影することである。ビデオ以前は、16ミリフィルム、8ミリフィルムの映画で撮影することが行われたが、それはごくわずかであった。撮影機材の普及はほとんどなく、映画撮影は珍しい記録方法であった。それでも早くは渋沢敬三やその仲間による映像が残されているし、第2次大戦後にも少なからずの作品が制作されている。

以上のように、観察を記録して資料化する方法は多様である。文字による記録が現在までもっとも普及した方法であるが、観察を文字化することは至難の業と言える。実際に、文字で記録することは、観察結果のごく一部のみを記録することであり、多くの側面は捨象して消し去っている。観察の対象は形のある事物であり、動きのある事象である。それを時間と空間の広がりの中で把握して、文字で表現することは実際には不可能である。図像、画像、映像という順序で、観察結果を写實的に、そして時間と空間をあわせて記録する方法が登場し、普及してきた。今や、観察結果をそれらで記録することは常識となっていると言って良いであろう。特に、画像と映像が基本的な方法となった。しかし、それは記録を残すという点で基本的な方法となっているだけであり、記録を活用する、特に研究に活用するという点では必ずしも明確になっているわけではないし、その方法も検討されていない。多くの画像は挿絵として掲げられても、画像から直接研究が展開することは試みられていないと言って良い。まして、映像となると、16ミリフィルムや8ミリフィルムの時代から、記録として残されていても、それを研究する、あるいはそれによって研究するという試みは乏しい。そして、社会教育映画として制作された作品が多くの人に親しまれ、民俗事象の観察結果としての映像はその教育映画という性格に規定されてしまった。観察をそのまま映像にするのではなく、編集して、ナレーション

を入れ、バックグラウンドミュージックを入れ、観客の感動を呼ぶように工夫をし、また興味がそれないようにする。映像についてはそれが当たり前となり、ナレーションやバックグラウンドミュージックに疑問を示すことはほとんどない。

民俗学という研究にとって図像、画像、映像を資料として活用するということはどのようなことから基礎的なところから検討しなければならないであろう。研究資料としての図像、画像、映像について理論的検討が加えられ、また資料操作法との関係を検討しなければならない。その際、図像、画像、映像を否定的にとらえる必要はない。文字記録に限界があることは明瞭であり、その弱点を克服する手段として図像、画像、映像は明らかに優れている。それを活用することを前提に、研究法を検討することが求められる段階である。

#### 4 図像を生み出す民俗学を

聞き書は、すでに指摘したように、聞きつつ書き留めることであり、本居宣長が『玉勝間』において師の教えを学ぶ方法として提示した言葉である。それを、伝承者を師とし、聞き書をするという方法を民俗学は採用した。権力的な聞き込みや調査者中心の聞き取りに対して、被調査者を師と仰ぎ、教えて貰うという姿勢を示した用語と言って良いであろう。その聞き書の書くという行為は、誰も疑うことなく文字で書くことと理解してきた。書くという表現をする以上は、文字で書くことを必然的に示している。自覚することなく、聞き書と表現することで、文字で記録することに支配されてきた。したがって、聞き書の過程でフィールドノートに絵や図が記入されることがあっても、あくまでも付随的なことであり、補助的なことと考えられてきた。民俗調査の技法を説明する際にも、聞き書のフィールドノートへの記録は文字による記録のみが注意され、絵や図については必ずしも関心が払われなかった。しかし、実際には、フィールドノートには少なからずの絵や図が書き込まれているはずである。そのことを必ずしも自覚してこなかった。調査法の説明でも、聞き書に伴う図像記録化は取り上げられてこなかった。

このように、今まで関心の対象にはなっていない図像を、聞き書の結果を記録する方法として考えることが必要であろう。しかし、聞き書での被調査者の話を調査者が直接図像にすることは、調査者が勝手に頭の中でイメージを作り上げて、フィールドノートに描くことになる。それは明らかに間違いである。聞き書の過程で図像を記録するためには、何らかな形で被調査者から図像を示して貰わなければならない。そのことは、多くの調査者は経験的にはしばしば行ってきたことでもある。聞き書の過程で、話が理解できなくなると、その事項について図を描いて説明してくれるように依頼することは度々経験している。それを自覚的に行い、その方法を共通のものにしていくことが必要であろう。聞き書の過程で、被調査者に求めて、図解による説明をして貰う、またスケッチを描いて貰う、そしてそれをフィールドノートに記録する。その際、被調査者が描いてくれた図をそのまま単に写すのではなく、聞き書という特徴を活かさねばならない。すなわち、被調査者の説明や解説と結びつけて図像を記録することである。単なるスケッチではない図像による記録がなされねばならない。一種の絵引、あるいは図解の方式でフィールドノートに記載することが必要である。民俗学が古くから重視してきた民俗語彙を図像の記録に結びつけることが、その第一である。被調査者が描いてくれ

た図像の各部分について地域の人々が表現する民俗語彙を、図の中に記載する。また、図像を補う形で説明を記載する。これが絵引であり、図解である。

また、観察から図像・画像・映像を生産することも重要である。このことは前節で述べたので、ここでは再説しないが、その重要性は従来はほとんど顧みられることがなかった。そのため、方法についても検討されることはなかった。

今までも少なからず図像が民俗の記録法として採用され、それなりの量が蓄積されている。しかし、調査法としてはあくまでも中心は聞き書による文字化にあり、観察による図像化は副次的、従属的な位置を与えられているにすぎない。また、聞き書の過程で図像を作成して記録化することはほとんど自覚されることはなく、結果として資料化の方法として考えられてこなかった。全体として、民俗調査の結果を記録するということは、文字による記録のみが考えられてきた。

現在必要なのは、民俗調査の記録という行為を文字化においてのみ考える前提を破棄しなければならない。文字優先の考えを破棄し、図像化記録を文字化記録に対し従属的・副次的存在から解放し、独立した民俗資料の記録として考えなければならないであろう。文字と対等な位置を図像に与えることである。もちろん、量的に見たときに、図像による民俗資料の記録よりも文字による民俗資料の記録のほうがはるかに多いであろう。しかし、理論的には、文字による資料化と図像による資料化を対等に位置づけなければならないであろう。もちろん、そのことは図像だけについて言うのではない。図像・画像・映像による民俗の記録、データ化を言うのである。民俗調査を聞き書のみ限定しないことと大きく関係するが、観察による民俗の記録は必然的に図像、画像、映像の採用を要求する。観察結果を文字で記録することが困難であることは述べたとおりである。

民俗調査の成果の有力な表現形式が民俗誌である。特定地域の民俗を相互関連させ、全体的に描き出したものである。民俗誌は単に民俗事象が網羅されていることを意味しない。地域の民俗の特質を、民俗の相互関連性を把握して、全体像として示すことである。今までは民俗誌と言え、当然の如く、文字で記された。民俗誌は文章で記述されるべきものであった。確かに写真、画像、図像が文章の間に挿入されて、読者の理解を助ける力となっている。またしばしば巻頭には口絵写真が挿入されることが多い。地域の民俗的特質をイメージとして理解できるようにするための設定である。これらの工夫が行われても、それだけでは民俗誌にはならないというのが常識であろう。しかし、この考えを打ち破らねばならない。

文字ではなく、非文字の民俗誌の構想を抱くことがあっても良いであろう。今までもその可能性として考えられてきたのは、画像による民俗誌である。具体的には、写真民俗誌というべき、民俗を把握し、その全体像を示す方法である。今までの主客を逆転させ、非文字である画像、写真を主役に置いて、文字の記述を脇役とする方法である。全く完全に文字を排除することは必要ない。抽象的なもの、観念的なものを表現できるという文字表現の利便性は十分有効に利用する。しかし、それはどこまでも脇役であり、補助的である。民俗誌としての、地域の民俗全般を示し、その相互関連を明らかにして、民俗の全体性を理解できるようにする方法として写真を使用する。写真民俗誌は、写真を挿絵の位置から解放して、主役に据えることである。

同様に、映画、ビデオという映像による民俗誌の可能性も考えるべきであろう。映像民俗誌は、民俗事象を動的に把握できるという点で、写真よりもはるかに対象を正確に把握し、理解を助ける。

その場合、あまり考えもせず、一般的な映画と同じように理解してしまう危険性がある。いわゆる記録映画は必ずナレーションを伴い、またしばしばバックグラウンドミュージックが挿入され、またテロップが画面に流される。これらが映画の内容理解に貢献することは、教育映画の手法として定着していることで分かる。ほとんどの人が疑問を抱かない映画制作の方法であろう。特に、ナレーションが不可欠と考える人は多いであろう。ナレーションという説明があって、はじめて映像が見る人に理解されるという考えである。しかし、ナレーションは、映像から直接理解することを弱め、映像を見る人々を一定の方向に導き、対象からではない知識とイメージを与える。映像民俗誌を追究することは、先ずナレーション、バックグラウンドミュージック、テロップなどに依存する作品化から脱出しなければならない。そして、対象を撮影した映像そのものから、地域の民俗の全体像を理解できるように編集する。

写真民俗誌、映像民俗誌は、少ないながらも、その試みがなされてきた。必ずしも成功したと言えるものは多くないが、努力が重ねられてきた。しかし、意外にも、図像による民俗誌はほとんど存在しない。自らの目で確認した結果を、筆を執って文字であらわすのではなく、同じように絵筆を執って図像に描いて示すことはさほど困難なことではない筈である。古老が、今は消えてしまった過去の民俗を、記憶から呼び出して、絵に描き、冊子を刊行するという試みは、日本各地で行われている。地域の民俗の全体を相互関連して描いた民俗誌とは言えないが、文字で表現するよりも、はるかに今はなき民俗を具体的に示している。これを意識的に行うことがあっても良いであろう。調査結果を図像で描き出して、その全体を民俗誌としてまとめる。

民俗学は、専ら文字に依拠せずに伝えられてきた事象を扱いながら、皮肉なことに、文字化し、文章で記述し、表現することに陥ってきた。そこから脱出して、図像、画像、映像を生産し、それらによって研究し、また研究成果を示す方法を確立することが肝要なことと言える。

## 5 過去へのフィールドワーク

日本だけでなく、世界各地の民俗学は、現在の生きて存在する民俗で歴史を認識する学問として成長してきた。歴史離れの傾向が見られるようになったのはごく最近のことに属する。民俗学は、現代社会でのフィールドワークが前提であり、現在把握できることから歴史を再構成しようとしてきた。しかし、そのみにこだわり、そこに民俗学の特質を見る考えは必ずしも正しいとは言えない。民俗事象は現代に存在するだけでなく、過去にも存在した。民俗を研究するということは、現在生きて存在する民俗だけでなく、過去に存在した民俗も対象にすることである。

民俗学は、現在人々の行為として示されている民俗を聞き書その他の方法を駆使して把握し、分析する。フィールドワークを基本的方法にして民俗を把握する。そのフィールドワークは、民俗を行い、伝えている人から聞き書によって把握する、行為として示されている民俗あるいはその結果としての事物を観察によって把握するなどの方法が採用される。これが民俗学が民俗を把握する中心的方法であることは間違いのないであろう。19世紀に発生し、21世紀まで存続してきた民俗学は、そのようなフィールドワークによる把握を発達させてきた。しかし、過去に存在した民俗の把握法については十分に検討することなく、安易に過去に記録された文字資料の利用が許されるかどうかという問

題に絞られていた。1950年代に行われた日本民俗学の性格論争がその典型的なものであった。

民俗が現在だけでなく、過去にも存在したというように単純に考えれば、民俗調査も現在の民俗を把握するためのフィールドワークだけでなく、過去の民俗を把握するフィールドワークが存在しても一向に構わないであろう。現代の民俗をとらえる方法は多様であり、フィールドワークも一種類ではない。同様に、過去に対しても、様々な方法を駆使して民俗を把握する多様なフィールドワークが試みられねばならないであろう。問題は、現在の民俗を把握するということは、たとえの通り、生きている民俗を把握することである。変化したり、変動したり、動きが見られる。それ故に動的に民俗を把握することが可能である。それに対して、過去の民俗は、過去が確定していることによって、先ずは動きのない、固定的なものとして把握することになる。そこに限界がある。しかし、時間軸にそって長期にわたっての事象を、実年代的にとらえることができる。

過去に存在した民俗は、伝承という行為によって現在に引き継がれている。そのことは現代の民俗を対象とする民俗調査というフィールドワークによってとらえる。しかし、特定の時間軸の中での過去に存在したことは立証できない。特定の時間の中で存在したことを、過去へのフィールドワークによって把握することが必要になる。過ぎ去った過去は確定している。過去に踏み込んだ途端に、民俗は固定した動かないものとして姿を現す。それが過去の姿のまま把握できるとすれば、特定の過去に記録されていることが重要である。

民俗学の基本的性格は、現代の民俗の調査研究によって歴史的世界を認識するところにあるが、過去へのフィールドワークもその歴史認識にプラスになる。現代の民俗と特定の過去に存在した民俗を総合することで、より豊かな歴史的世界が現れてくる。それは変化を明らかにする場合もあれば、変化しない場合もあるし、あるいは途中での消滅を教えてくれることになるかもしれない。いずれにしても、現代の民俗と特定の過去の民俗を総合することは無駄なことではない。

過去に生産され現在に残されている資料群へ踏み入ることが、過去の民俗を把握する手段である。過去に生産された民俗を教えてくれる資料を探し出し、そこから民俗を抽出する。現代の民俗調査のように、民俗を記録することを目的に一定の方法を確立し、それに基づいて作成されることはなかった時代において、民俗の記録を発見することは、意図せずに民俗を記録した偶然記録のなかを探索することである。

無文字社会ではない日本では、民俗が過去にも文字によって大量に記録されたことは多くの事例から判明している。したがって、過去の特定の時間軸のなかで民俗を発見する、記録すると言えば、文字資料のなかから探し出すことを意味してきた。近世の随筆、日記、地誌などは民俗を発見する素材であった。また、村方史料のなかの各種の文書に記載された民俗事象を拾い出すことも行われてきた。近世以降の豊かな文字資料の存在は、そこに民俗が記述されていることを知って以降、しばしば活用されてきた。そして、量的にははるかに少ないが、中世の記録からも民俗を取りだし、古代の記録からも民俗を読み取る努力がなされてきた。『古事記』、『日本書紀』、あるいは『風土記』の記述の中に民俗を発見することも行われてきた。

日本が豊かに文字を残す社会であることが、ややもすると特定の過去における民俗の発見を文字に限定することになったと言えよう。特定の過去に生産された民俗の記録と言え、誰しもが文字による記録とってしまう状況が現出した。しかし、前節までに見てきたように、民俗を記録する方法は

文字だけでなく、図像、画像、映像、あるいは音響など多様な方法がある。当然、過去に偶然記録されたものにも、文字ばかりでなく、多様な形態があると推測して良いであろう。

明治以降であれば、少ないながらも写真という画像資料が作成され、残された。最初、写真は記念写真として写され、残された。次第にその量は増したが、畏まった記念写真を脱して、さまざまなスナップ写真が撮影され、残されるようになったのは近年のことと言わねばならない。時間をさかのぼれば、写真のような機械的に記録する方法は存在せず、人が自ら筆を執って生活を記録することのみが方法として存在した。日記や書簡、あるいは様々な随筆という文字資料に加えて、筆を執って描く図像が残された。図像の中心は絵画、絵図である。近世には大量の絵画、絵図が作成された。中世以前になると、その量は急激に少なくなり、絵師・画工の描く職業的絵画のみになってしまう。

民俗調査は現代の地域社会に赴き、地域で行われ、伝えられている民俗を聞き書や観察などによって把握する。そこには必然的に動く民俗を動的に理解することが含まれる。変化であり、消滅であり、生成である。特定の過去において存在した民俗を、現代に生きる人間が把握しようとする場合、生身の人間がそのまま過去に戻って聞き書とか観察をすることはできない。現在に生きつつ、過去を間接的に把握することになる。その間接的に特定の過去の民俗を教えてくれるものが、先ずは文字で記録された資料であった。しかし、同様に図像資料や画像資料も間接的に民俗を教えてくれる。その資料群に分け入り、自己の問題意識にそって、民俗を選択し、抽出する。聞き書や観察は不可能であっても、それに相当する行為として資料群から民俗を導き出す。その場合、聞き書に相当するのが日記、随筆、地誌などから文字資料を取り出すことであり、観察に対応するのが各種図像資料、画像資料、時には映像資料を読み取り、民俗を引き出すことであろう。過去へのフィールドワークによっても、聞き書や観察に相当するところを行い、資料を獲得し、記録化することが可能になるのである。

## 6 民俗資料としての図像

聞き書や観察の結果を文字で記録するのが、従来の基本的方法であり、そのことが疑われることはほとんどなかった。しかし、たとえば写真民俗誌や映像民俗誌が構想されるように、調査結果を文字以外の方法で記録することも考えて良い。そのことを過去に適用すれば、過去の時間の中で民俗を表現する文字ばかりに注意するのではなく、民俗を示す図像、画像、映像にも注目する。過去へのフィールドワークで、図像・画像・映像の発見を積極的に行わなければならない。ここでは、そのなかの図像について考察してきた。以下でも、過去に描かれ、民俗の資料として現代に登場してくる図像資料について整理しておこう。

[1] 絵画 文字以外で最も親しく接してきた表現形態が絵画であろう。日本では中世にも少なからずの絵画が描かれ、近世以降にはその総量は急激に増大した。もちろん、日本における鑑賞用の絵画は、職業的な絵師・画工が描くもので、中国の影響を大きく受けていた。その描き方は約束にしたがって描き、実際の事物や風景を写生するということが少なかった。中国の絵画と同じように、山水画や花鳥図が理念化された構図で描かれた。あるいは粉本に従っての描写が行われた。これは大和絵においても同様であった。

しかし、日本では、東アジアの他の諸地域に比較すると、はるかに、実際の風景を写生し、また

人々の行為を描き出すことが盛んになった。中世末・近世初頭に描かれた「洛中洛外図」や「江戸図」は、対象とした地域の様相を詳細に描くと共に、そこに行き交う人々、商いをする人々を生き生きと描いている。それらは、図幅それ自体が、特定の地域の特定の時間における民俗誌という側面も持っていると言える。また、近世中期以降に人々の日常で楽しむ材料となった浮世絵も、人々の生活を描いている。近代以降には、ヨーロッパの絵画技法が入り、写実的な動向も作ったが、また抽象的描写、イメージによる組み立てが盛んになった。生活を直接描いている絵画は必ずしも多くない。そうであっても、絵画によって、特定の過去の民俗を知ることができる。特に「洛中洛外図」のような広い範囲を対象に描いた絵画は、民俗世界を描いた民俗誌としての性格を持っている。

近代学校教育は、図画工作を科目として設定し、絵画を自ら描く教育を行った。図工の中では、写生が大きな意味を与えられた。対象を写実的に描く訓練がなされ、様々な機会に絵を描くようになった。近世にもすでに知識人たちが文人として登場し、絵を描くことを趣味とした。素人絵ともいべき種類の絵画が日常的に制作され、それらの中には観察結果を描いたり、かつての体験を描いたりすることが行われた。

[2] 挿絵 近世の大きな特色は、書籍の出版が多くなったことである。多くの部数が印刷公刊された。庶民層が楽しんだ書物は、文章によって筋を立てているが、そこには必ずのように挿絵が挿入されていた。近世中期以降の各種の戯作文学は大量の挿絵を入れており、読者の興味をかき立てた。またなかば公然と出版されたと考えられる多くの春本も大量の春画を描き出した。このような挿絵を挿入した文学作品は近代にも受け継がれ、新聞小説はじめ多くの小説類において同様に挿絵が挿入されている。近世以降の日本では、出版物に絵画が入っていることは何ら不思議なことではなかった。そこから多くのことを情報として入手していたと思われる。

多くの文芸作品の挿絵は、挿入されたという意味では、文章が主体であり、あくまでもその文章を引き立てるための副次的、脇役的な存在であった。しかし、次第にその位置は対等なものに近づいていった。その様相を見せてくれたのが近世後期に次々に刊行された名所図会である。1780年に刊行された『都名所図会』がベストセラーになったと言われるように、大いに歓迎された。その書名が示すように図会である。絵画と文章がほぼ対等な位置になっている。文章に対応した大量の挿絵が実際の観察結果として挿入され、その場所の具体的な姿や行事が示されている。読者は、挿絵を追いかけることで、特定の地域を旅した感じになると共に、また実際に訪れた際のガイドブックの役割を果たした。今日のビジュアル本である。名所図会の挿絵を現在の場所に持参して、その事物を比定しても、その具体的様相が容易に分かる。それほど正確に写生をしていた。

挿絵はもちろん職業的な絵師が描くものであった。多くの著名な絵師が挿絵を描いており、日常的な収入源としては、出版物の挿絵を描くことが重要であったと思われる。名所図会では、現地へ足を運んでスケッチをして描く必要もあり、少数の絵師が担当したのでは不可能だったと思われ、実際に多くの絵師の競作となっている名所図会もある。

[3] 絵日記 各地の文人たちのなかには、絵を描くことを学んだ人も少なくない。しかし、その学び方は手本・粉本による学習であり、結果として描かれたものも大部分が山水画であり、花鳥図であったりする。地方文人の子孫の家に残された作品がそれを教えてくれる。しかし絵心を身につけた文人たちが旅に出ると、その絵心が旅のなかで発見した興味深い事物を写生することとなった。旅の過

程で日記を付けるということは古くから行われてきたが、その表現方式として絵を挿入したり、絵を中心に言葉を添えるということが行われるようになった。旅日記であるが、絵日記としての性格を帯びたものが登場した。有名な菅江真澄の遊覧記は、このような旅日記である。行く先々で人々の生活を観察し、スケッチを描き、日記のなかに挿入している。あるいは、鈴木牧之の『秋山記行』も、信越国境地帯の秋山を訪れ、村々を訪れた際の日記であるが、やはり注目した事物を絵にして挿入している。旅という行為が感動を呼び、観察結果を絵にすることが行われたが、それが次第に日常生活に及んだと思われる。日々の生活を絵日記として書き残すようになった。特に近代の学校教育が絵を描くことを教育課程として組み込んだ結果、子どもの段階から絵に親しむようになった。そして自ら絵を描くことが行われた。

[4] 絵図 近世の村方文書のなかに多くの絵図が残されている。多くが自村の概況を地図として描いたものである。領主の交替に際して提出したもの、幕府の巡見使を迎える際に準備したもの、あるいは紛争に際して論所を描いたものなど、その作成の目的は多様である。それはもちろん実測図ではない。概念図というべきものであるが、それだけに人々が自分たちの生活空間をどのように認識していたか知ることができる。そこでは、近代のような記号化は行われず、実際の事物をイメージできるような形で描くことが多い。家屋、寺院、神社、高札場、堰、橋などいずれも実際の姿をイメージできるように描いている。また多くの街道絵図が作成された(山本光正 2006)。このような絵図は、近代になると急速に作成されなくなり、実測図に取って代わられる。自分たちが描いた絵図ではなく、外から与えられた実測による地図になる。各種の地図が作成され、それらを必要に応じて利用するようになるが、その徹底した記号化は、地図を見る人に生活世界の具体的なイメージを与えることがなくなってしまった。絵図から地図への変化は、空間認識においては後退をもたらした可能性が大きい。

以上のように、近世に始まり、近代、そして現代まで、日本では多くの図像が作成され、人々は日常的に親しんできた。そこには、山水や花鳥のような定型的な絵も多いが、しかし同時に風景や生活を写生したものも少なくない。これらの図像生産、そしてその資料の残存は、恐らく世界的に見ても、日本が最も豊富な地域であろう。同じ東アジアであっても、中国や朝鮮半島においてこのような図像資料を見ることはほとんどできない。日本の歴史研究、民俗研究がこれを活用しないということは大きな損失である。

すでに述べたように、現在の民俗調査が聞き書だけでなく、観察を行い、民俗を記録する。過去への民俗調査は、文字資料から民俗を発見する。過去での聞き書と言って良いであろう。それに対して、過去での観察が図像資料の活用ということになる。図像、画像、映像を観察して、そこから有効なデータを取り出し、民俗として記録する。日本の近世以降は、図像資料が大量に生産され、また今日に残されている。その図像の森に分け入り、観察して民俗を発見する。今までは余り試みられてこなかった方法である。たまたま発見した民俗の図像を、挿絵として挿入することはあっても、研究資料として活用する努力はほとんどなされなかった。民俗学の世界で唯一試みられた図像資料活用のための工夫と努力は、日本常民文化研究所が行った『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻の編纂であった(渋沢敬三 1965~1968)。

## 7 民俗学も図像資料を

本稿では、図像資料と民俗学の関係について、二つのことがらを述べてきた。

一つは、民俗学は、民俗調査および研究の過程において積極的に図像を生産し、図像を活用すべきことを述べた。現代日本の民俗学は行為の民俗学という基本的性格を持ち、フィールドワークという民俗調査を前提にして組み立てられている。そのフィールドワークにおいては、聞き書が重要な方法であるが、それに加えて観察をもっと重視しなければならないということを述べ、聞き書と観察を基本とする民俗学を主張した。そして、その調査過程において文字による記録だけでなく、図像を積極的に生産しなければならないことを述べ、民俗の資料化には、文字化に加えて、図像化、画像化、映像化が採用され、多様な方法で記録される必要があり、またそれらによって研究されなければならないことを主張した。

そして二つ目には、民俗学が過去の民俗を把握することは、民俗を記述した文字資料のみを対象にするのではなく、過去に制作された図像資料、画像資料などを積極的に活用すべきことを述べた。民俗学は現代から歴史を認識する学問であるが、同時に過去に向かってフィールドワークをすることが必要であり、特定の過去に存在した民俗を把握して、それをも研究対象にすることで、より豊かな歴史像が形成できることを指摘した。そして近世においては絵画、絵図などの図像資料を、そして近代以降であれば画像資料、さらには映像資料を対象にして民俗の発見と記録をするべきことを主張した。たとえば、民俗調査における観察に相当する行為が、図像資料、画像資料などにおける民俗の発見行為である。民俗調査において、聞き書だけでなく、観察を積極的に行うことに対応して、特定の過去の民俗を把握するために図像資料、画像資料に対する観察が不可欠と言える。

そして、本稿で果たせなかった問題点を掲げておこう。それは図像資料、画像資料、映像資料による民俗学研究法の開拓である。聞き書結果としての文字記録だけでなく、図像資料、画像資料での民俗の資料化は述べたが、それらによって如何に研究するかについて検討することができていない。図像資料から民俗を読み取るという言葉は述べただけでは研究法にはならない。図像資料、画像資料を分析する方法、そして分析結果としての解答・主張を画像、図像で提示していく方法が考えられなければならない。資料化と研究成果の中間に位置する民俗誌について、写真民俗誌、映像民俗誌の可能性を提示したが、写真民俗誌、映像民俗誌とは如何に制作すべきなのか、それらの内容を議論する方法、旧来からの文字による研究とどのように関連づけるのかなどは検討していない。図像資料を民俗の研究資料として解析する方法を検討することが果たせて、はじめて図像資料が研究書の挿絵の段階から研究の中核的な位置へと上ることができる。そして、旧来からの文字化された民俗資料と図像としての民俗資料を、統合、融合して研究をする方法を確立することに向かわねばならないであろう。

民俗学にとって図像資料による研究は今後の大きな課題である。

### 参考文献

朝岡康二編

2004『民俗学的画像に関する基礎的研究』（国立歴史民俗博物館研究報告 117）

大森康宏編

- 2003『マルチメディアによる民族学』（国立民族学博物館調査報告 35）
- 小川直之
- 2004「画像資料と民俗学」『人文科学と画像資料研究』（國學院大学学術フロンティア事業研究報告）1
- 小川直之
- 2007「民俗芸術写真と民俗研究」『折口博士記念古代研究所紀要』10
- 小川直之
- 2008「画像資料研究の課題」『國學院大学日本文化研究所紀要』100
- 折口信夫
- 1921「沖縄探訪手帖」（『折口信夫全集』16，中央公論社，1976）
- 折口信夫
- 1923「沖縄探訪記」（『折口信夫全集』16，中央公論社，1976）
- 香月洋一郎
- 2007「風景としての情報」『手段としての写真』（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム調査研究報告 4）
- 香月洋一郎
- 2007「『澁澤写真』の活用に向けての一試行」『「景観」と「環境」についての覚書』（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書）
- 川森博司
- 2005『遠野民俗誌 94/95』（研究映像）国立歴史民俗博物館
- 北村皆雄・新井一寛・川瀬慈編著
- 2006『見る，撮る，魅せるアジア・アフリカ映像人類学の新天地』新宿書房
- 倉石忠彦
- 2004「画像資料と民俗誌」『人文科学と画像資料研究』（國學院大学学術フロンティア事業研究報告）1
- 黒田日出男
- 2007『増補絵画史料で歴史を読む』（ちくま学芸文庫）筑摩書房
- 篠原徹
- 1993『黒島民俗誌』（研究映像）国立歴史民俗博物館
- 渋沢敬三編
- 1965～68『絵巻物による日本常民生活絵引』角川書店（神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引』平凡社，1984）
- 福田アジオ
- 1994『景観の民俗誌』（研究映像）国立歴史民俗博物館
- 福田アジオ
- 2004「図像資料としての素人絵—生活絵引き編さん資料としての可能性—」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』2
- 福田アジオ編
- 2006『松原の民俗—長野県南佐久郡小海町松原—』第一部写真民俗誌，（神奈川大学歴史民俗調査報告 3）神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 矢野敬一
- 2005『写真家・熊谷元一とメディアの時代』青弓社
- 柳田国男
- 1934『民間伝承論』（『柳田国男全集』8，筑摩書房，1998）
- 山中笑
- 1902～1903「甲斐の落葉」『東京人類学会雑誌』199～210（『甲斐の落葉』郷土研究社，1926）
- 山中速人編

2002『マルチメディアでフィールドワーク』有斐閣  
山本光正

2006『街道絵図の成立と展開』臨川書店